

\*主イエスによって目を開けられた人は、自分に起こった驚くべきわざを、勇気をもって証をしたがゆえに追放された。イエスは彼を探し出し言われた。「あなたは人の子を信じますか。」イエスは彼に言われた。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです。」彼は言った。「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。（9：37～38）衝撃の、感動的な初対面である。彼は肉体の目だけではなく、霊の目もあけられてイエスを救い主として信じることができた。それゆえ、イエスを神としてあがめ、礼拝したのである。

\*そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」（9：39）主イエスは世を「さばく」ために来たのではなく、「救う」ために来たとご自身でも言われている。しかし、ここでの「さばき」は、霊的な目が見えない人と見える人をはっきり「分ける」という意味である。パリサイ人の中でイエスとともにいた人々が、このことを聞いて、イエスに言った。「私達も盲目なのですか。」（9：41）パリサイ人たちは、自分たちは律法を守り、神に従う生活をしていると自負していた。「良い行い」によって救いを得ていると思っていたのである。しかし、イエスが来られて、救いは「行い」ではなくイエスを信じる「信仰」によることがはっきりと示された。そういう新しい時代に入ったのである。

\*イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私達たちは目が見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」（9：40）自分は目が見えているという驕りがある人は実は霊的な目が見えていない。反対に、自分は罪人であり、まことの魂の救いが必要であることを認めて救い主を心から待ち望んでいたならば、今来られたイエスがキリストであることがわかり、罪が解決される。この盲人はこの神様の逆転のわざに浴したのである。

パウロも生粋のパリサイ人であり、自分では「目が見える」と自信があり、クリスチャンを次々と迫害していた。しかし、ダマスコへの途中、主イエスと出会い、3日の間目が見えなくされた。このことは霊の目が開かれる準備であったと思われる。そこで彼はイエスの声をはっきりと聴き、霊的な目が見えていなかったことに気づいたのである。そして回心し、肉体の目も空き、その後はイエスの名を運ぶ大伝道者となって用いられるのである。まさに神の大逆転のわざである。